家庭訪問事業なども始めた。

西野、大西、もう一人の医師の三人が寝る間も惜しんで働いた。勤務時間が一日十四、五時間になることは珍しくなかった。こんなこともあった。

ある夏の夕方。西野は夕食までのひとときを子どもと海岸で過ごそうと海へ行った。そこへ、看護婦が飛ぶようにやってきた。

「院長、急患です」

子どもをその看護婦に預け、一キロの道のりを自転車で全力疾走。病院に駆けつけた。救急車で運ばれてきた患者はDOA（病院到着時死亡状態）に近い状態。当直の大西が集中治療室で心肺蘇生術をしている最中だった。まもなく、もうひとりの医師も三キロ離れたテニス練習所から走って駆けつけた。やがて婦長をはじめとする看護婦、放射線技師、臨床検査技師など十人ほどのスタッフが集まり治療に参加した。だれもが救急車のサイレンを聞きつけて自発的にやってきたのだった。治療の甲斐あって、その患者は一命を取りとめた。

こうした努力が住民への信頼につながり、受診者が増加。二年後、病院の収益は約二億五千万円アップした。そして、平成八年度から医師四人体制が実現した。

周産期医療のレベルの低さも、西野らにとって深刻な問題だった。島内には設備が不十分で老朽化した母子センターしかなかった。そのため、ほとんどの女性が島の外で出産した。しかし、何が起こるかわからないのがお産でもある。年に何回かは早産や自然流産などの悲劇が起きた。落とさなくていい命を失うことほど悲しいことはなかった。積もった思いを町当局にぶつけてみたが、なかなか色よい返事は返ってこなかった。わざわざ島の外にまで子どもを産みに行かなくてもすむ環境づくりがなぜ、できないのか。

昭和三十年代のニシン漁の最盛期、島の人口は二万三千人を数えた。北海道内はもとより、東北、北陸地方などから多くの人がやってきた。町は活気に溢れ、繁華街には遊郭までできた。そんな島が、ニシン漁の衰退と歩調を合わせてしぼんでいった。年々過疎化が進み、いまでは六十五歳以上のお年寄りが人口の二四%を占める。こうした状況を打破するためにも、島で子どもを産んでもらいたかった。

しびれを切らした西野らは、町当局にこう迫った。

「病院内に産科をつくることは過疎対策にもなるはず。若い人が安心して子どもを産み、もうひとり産みたいと思える環境を作ることが行政や医療の役目ではないか。あなたの娘が里帰り出産をしたいといったら、あなたは娘を呼びますか？　娘を呼べるような施設をつくることがあなた方の責任ではないのですか」

このことばで、利尻町、利尻富士町両町は、ようやく腰をあげた。当初、島の単独事業として五億円の予算がついたが、その後、利尻島を視察にきた北海道知事が理解を示し、道から一億五千万円の補助金が出ることになった。合計六億五千万円の予算で、病院に産科施設を増築、入院用に五ベッドが用意された。

緊急時のヘリコプターによる搬送方法についても、西野はデータを集められるだけ集めて説得に当たった。それまでは、搬送依頼時間、利尻到着・離陸時間、現着時間しかデータとして残っていなかった。そこで、西野は搬送にかかるすべての時間を分単位で調査、時系列を作ってレポートを書いた。その結果、ロスタイムを正確に把握することができた。ちょうどそのころ、阪神・淡路大震災が起こり、災害時の医療体制のあり方などがクローズアップされていた。こうした追い風にも助けられて、北海道は新規に新型のヘリコプターを購入し、防災航空室を空港内に新設するなどして救急搬送体制が強化された。

## 後輩へ「地域医療魂」をつなげる

三十代前半の若さで病院長を務めるというのは、そうたやすいものではない。医師としての仕事だけではなく、病院経営、さらには部下をも引っ張っていかなければならない。たしかに厳しい面はあるが、逆に、こうした経験はしたくてもできない場合がほとんどだ。社会を知るためのいい機会だと思って、西野は過ごした。

もともと政治的な動きをすることにあまり抵抗がなかった。利尻島の医療を良くするのだ、という一点で何事もこなしてきた。ときには行政当局をただす町議会議員の立場になり、あるときは、島を外に向けてアピールする広報担当者。そして、また別のときは、自らがジャーナリストとなって、島を客観的に「報道」する。さまざまな顔を使い分けてきた西野だが、ここまで


平成の天皇即位10周年記念。日本のシンボル、天皇家二世紀半の歩み。
天皇四代の肖像
明治 大正 昭和 平成
毎日新聞社
世紀末ブームの折、明治天皇をはじめ四代の天皇や皇后、皇族たちの素顔、ゆかりの品々など秘蔵の写真&資料で振り返る●定価 本体3000円＋税

毎日新聞社
〒100-8051東京都千代田区一ツ橋1-1-1